自衛隊の現場

陸上自衛隊 幹部候補生学校卒業所感

陸上自衛隊幹部候補生学校（学校長・吉川徳等陸将補）は、第104期一般幹部候補生（防大、一般大等出身者）課程362人に対する全ての教育を修了し、1月23日に卒業式を行いました。

式には森下泰臣陸上幕僚長、田中貴子久留米市議会副議長、多数の部内外来賓、卒業生ご家族などが出席し、厳粛に執り行われました。

この卒業にあたり、BU課程の卒業生に所感を寄せていただきました。

演習場で班員を指揮する候補生（陸幹候校）

幹部候補生学校を終えて

一般幹部候補生（BU）課程 3候2区隊 陸曹長

宮内 大弥（埼玉県出身）

振り返ると、幹部候補生学校で過ごした日々は、本当に濃密で、今まで過ごしたどの時間よりも、充実した日々でした。課目教育では戦術などの知識や各種技能について習得し、研修においては貴重な経験をして、知見を広げることができました。

また、資質に関する教育を通して、自分を知り、目指すべき幹部の理想像を固めることができました。

「自分を知り、自信をもって自分の進むべき職種を希望すること」が、私が入校時に掲げた幹部候補生学校での目標であり、それは達成することができたと思います。

このような充実した日々を送ることができたのは、ひとえに区隊の同期、そして指導部の皆さまのおかげです。

入校時の私は、新しい環境での生活に不安で押しつぶされそうでしたが、区隊に合流し、その一員となって、すぐに区隊のことが好きになり、前向きな気持ちになることができました。

2区隊は、当初から区隊長の方針「一心」にふさわしい、とてもまとまりのある区隊でした。もちろん、規律の乱れなどにより、指導部からのご指導をいただくことも多々ありましたが、「仲の良さ」という一点においては、他の区隊を圧倒する区隊だったと思います。

こうして振り返ると、本当に人に恵まれたということを実感します。区隊長をはじめとする指導部の方々は、特に人間性に優れ、その背中からは本当に多くのことを学び取らせていただきました。

また、同期とは苦楽を共にし、これ以上ないほどの強い絆を結ぶことができました。

教育を終えた今、私たちはそれぞれの部隊へと旅立ちますが、幹部候補生学校での数々の思い出は一生私たちのなかに残り続け、苦しいときや上手くいかないことがあったときに、力を貸してくれることと思います。

最後に、幹部候補生学校の素晴らしい教育環境を整えてくださった、すべての皆さまに深く感謝し、今後の部隊勤務にまい進していこうと思います。ありがとうございました。

◇ ◇

一般幹部候補生（BU）課程 4候5区隊 陸曹長

片山 彩華（埼玉県出身）

自衛隊に行く私のために、多くの方が温かい言葉をかけ、涙を流して見送ってくれたあの日から10カ月が経とうとしています。

入校当初は、目まぐるしく変化する生活の中で周りについていくだけで精一杯で、周囲に目を配ったり仲間を助ける余裕もなく、忙しそうにしている同期を眺めながら、区隊のために自分に何ができるのかも分からず、苦しい日々が続きました。

特に、体力に自信があったのにも関わらず、思っていたよりもできない自分の弱さや無力さを受け入れられない毎日でした。

こんな自分が部下の命を預かるのかと思い、不安で眠れない夜もありました。

同期や指導部の方々に助けてもらうばかりで、自分の成長や変化を感じられずもがいていましたが、今思い返せば、10カ月の間、支えてくれたすべての人や物への感謝の気持ちでいっぱいです。

尊敬する同期と指導部の方々に囲まれて、一日一日が濃密で充実していました。能力が追い付かない私を見捨てることなく、真剣にかけてくれた全ての言葉や思いやり、優しさを忘れることはありません。

これから部隊に配置されるにあたって、同期とは離れ離れになってしまいますが、ずっと一緒に過ごしてきたみんなとの関係を一層大切にしていきたいです。

幹部は孤独であると何度も教えられましたが、幹部候補生学校での記憶が、全国のどこかで頑張っている同期の存在が、常にかっこよかった指導部の姿が、涙が溢れるほど本気になれた経験が、これからの私を強く支えると信じています。

4候5区隊のような、仲間と助け合い、常に笑顔で、どんな困難も乗り越えていける部隊を育成する幹部自衛官になり、これから関わる全ての人に恩送りをできるよう、感謝を胸に一つ一つ自分にできることを頑張っていきます。

（注・階級は投稿時のもの。3月16日付で宮内陸曹長・片山陸曹長は3等陸尉に昇進予定です）

見送りを受け部隊へ（陸幹候校）

二十歳を祝う

名寄駐屯地

名寄駐屯地（司令・藤田明大1等陸佐）は1月12日、「二十歳を祝う激励行事」を実施し、二十歳を迎えた各駐屯部隊の隊員が駐屯地曹友会主催の「書初め」に臨みました。

各人は、それぞれ今年の目標、抱負および決意を真白い1㍍の用紙に大筆を用いて各部隊長、同僚および来賓が見守る中、思いを込めて書き上げました。

その後、駐屯地隊員食堂で行われた激励行事では、始めに、藤田司令が二十歳を迎えた隊員に対し「自ら考えること、仲間を意識すること、自らが豊かな人間になるため街に出掛けること」の3点を要望し、二十歳の門出を祝福しました。

次に名寄地方自衛隊協力会会長の加藤剛士名寄市長より「皆さんはこの地域の大きな宝、今後益々の成長と発展を祈念します。皆さんの頑張りが名寄市民の元気につながります」と激励しました。

今年の目標を「書初め」

また、中野秀敏北海道議会議員より「若い隊員がいることは大変心強い。これからも自衛官として活躍されることを祈念する」と祝辞をいただき、隊員は地域の皆さまの大きな期待を直接感じとりました。

最後に、二十歳を迎えた隊員を代表して第4高射特科群第316高射中隊・中田龍斗3等陸曹が「これまで支えていただいた方々への感謝の気持ちを忘れず、これからは支えていく立場であることを自覚し、日々成長していく」と謝辞を述べ、本行事は終了しました。

二十歳の節目を迎えた48人の隊員は、地域の大きな期待を背にそれぞれの部隊で与えられた任務を完遂するため、若さと情熱をもって日々精進していきます。

倶知安駐屯地

倶知安駐屯地（司令・山口自2等陸佐）は1月12日、駐屯地体育館において「令和6年駐屯地二十歳の集い」を実施し、新たに二十歳を迎えた隊員の門出を祝いました。

この行事は、倶知安町自衛隊協力会会長の文字一志町長をはじめ各自衛隊協力関係者の参加を得て、駐屯地の隊員が見守る中、参加した6人の隊員を祝福しました。

山口司令は式辞で「二十歳を迎えた諸君は、これからの将来に不安もあると思う。しかしその不安は多くの先輩、同僚、地域の方々と巡り合い、教えを乞い、失敗を重ね、経験を積み、さらに挑戦をを繰り返すことで、それが自信に変わっていくことと確信している。われわれを含む諸先輩方が歩んできた道である。臆することは何もない」と隊員を激励しました。

また代表としてあいさつを述べた北部方面対舟艇対戦車隊の秋山陸士長は、参加した各自衛隊協力関係者の方々に感謝の言葉を述べ、「守るべきものを守れるよう力をつけ日々精進していく」と力強く表明しました。

駐屯地では、今回教育入校のため参加できなかった隊員を含む10人が二十歳の節目を迎え、それぞれ志や夢や目標を胸に、これからの自衛官人生を担う決意を新たにしました。

記念写真

島松駐屯地

島松駐屯地（司令・豊田真陸将補）は1月17日、「二十歳の祝い」を実施し、島松駐屯地の新成人12人の門出を祝いました。

行事は恵庭市自衛隊協力諸団体の参加を得て駐屯地食堂で行われ、豊田司令は祝辞で「人生を400㍍トラックで例えるなら100㍍地点。人生の目的はこの400㍍をどのように走り切るか。今、学べることをしっかり学び、自らを鍛えて、強い気持ちで各人の400㍍を走り切れるよう願っている」と激励の言葉を送りました。

婦人協力会会長からお守りを

また、来賓を代表して恵庭市自衛隊協力会会長の原田裕恵庭市長からは「長い自衛隊生活に希望をもって、さまざまな任務に対応すべく訓練に励んで立派な自衛官になってください」と祝辞をいただきました。

その後、駐屯地曹友会からの記念品と、恵庭市自衛隊婦人協力会会長の中川幸子氏から手作りのお守りを受け取りました。

新成人代表の第101高射直接支援大隊第1直接支援中隊の唐谷3等陸曹は「訓練・業務に今まで以上に責任ある行動をして、何事にも前向きに全力で取り組んでいきます」と抱負を述べ、決意を新たにし「二十歳の祝い」は参列したたくさんの方々から祝言を受け、終始和やかな雰囲気で終了しました。

弘前駐屯地

弘前駐屯地（司令・菫沼眞1等陸佐）は1月17日、弘前駐屯地体育館において「弘前駐屯地二十歳のつどい」を実施しました。

今年度中に二十歳を迎える隊員たちが、国防を担う使命を胸に決意を新たにしました。

式には教育などに参加中の隊員を除く48人が出席。

中隊の隊員らが見守る中、菫沼司令が式辞で「皆さんが二十歳になり、自分で人生を切り開き進むことができるようになったことが喜ばしい。人生の主人公は皆さん自身、輝く誇らしい人生を送ってもらい、これからの活躍を期待する」と激励の言葉を送りました。

今年の目標の発表

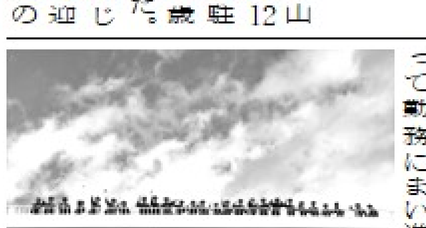
続いて代表者が「失敗を恐れず挑戦し、さまざまなことに貢献できるようこれからも日々精進していく」と決意表明しました。

式典を終え、二十歳の隊員たちは事前に書いた書初めとともに今年の抱負を発表し、中隊の隊員たちからは大きな拍手と温かいまなざしが送られました。

松本駐屯地

松本駐屯地（司令・秋山伸太郎1等陸佐）は1月12日、今年度二十歳となる駐屯地の隊員30人の「二十歳を祝う会」を実施しました。

臥雲義尚松本市長をはじめとする多数の来賓者を迎え、秋山司令から「感謝の気持ちを忘れずに謙虚で前向きに活躍することを期待する」と祝辞を受けると、隊員代表の第2普通科直接支援小隊所属の関根志那陸士長は「この厳しい実社会で対応していくためには、常に前向きに歩んで一人の社会人・一人の自衛官としての自覚と強い責任感を持って勤務にまい進していくことを誓います」と決意を述べました。


紙飛行機を一斉に飛ばす

終了後、隊舎屋上に移動し一人一人が二十歳への決意を述べ、最後に恒例行事でもある、紙飛行機を一斉に飛ばし、今後の飛躍を胸に誓いました。

船岡駐屯地

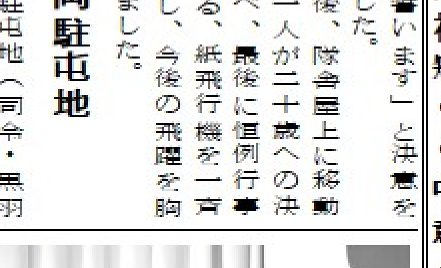
船岡駐屯地（司令・黒羽明陸将補）は1月15日、令和6年駐屯地成人行事「二十歳のつどい」を実施し、対象者25人のうち教育入校などによる欠席者を除く15人を激励しました。

この行事には、船岡自衛隊協力会会長の柴田町長をはじめ、自衛隊協力団体など（隊友会、家族会、防衛・駐屯地モニター）の方々8人の来賓をお招きし、駐屯地所在隊員とともに激励していただきました。

行事は、国歌斉唱、駐屯地司令式辞、来賓祝辞、二十歳を迎えた隊員の紹介、記念撮影を実施した後、記念会食を隊員食堂で行いました。

黒羽司令から「物事の真偽や優劣などを見分ける力をつけてほしい」「自分の思いや行動が運命を決める。感謝の気持ちを持ち、今後の人生を力強く歩んでほしい」と二十歳を迎えた隊員に激励の言葉を送りました。

そして、二十歳を迎えた隊員の紹介において、参加した隊員は色紙に自ら筆で書いた漢字一文字を掲げ、一人一人が決意表明を実施しました。



漢字1文字による決意表明

「発」を掲げた谷地田陸士長は「自分の考えや意見を発信、発表できる大人になります」と力強く抱負を述べました。

他に「零・ゼロから自分を見つめ直し成長していきます」「恋・今年こそ彼女を作ります」などの決意表明もありました。

二十歳を迎えた隊員は、それぞれの思いを今後の抱負として発表し、決意を新たにしていました。

芦屋基地

芦屋基地（司令・北川英二空将補）は1月24日、今年度二十歳を迎えた隊員に対し、社会人および自衛隊員としての立場を認識させるため「令和5年度芦屋基地二十歳のつどい」を実施しました。

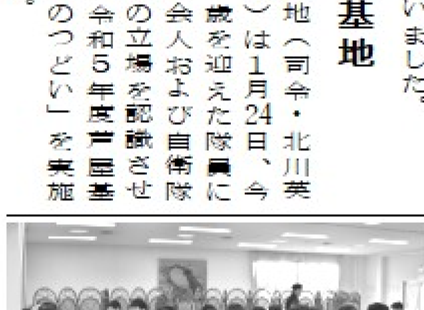
北川司令から祝辞の中で「利他の精神」を持つよう訓辞があり、複数の隊員が緊張の面持ちで答辞を述べました。

共通して聞こえてきたのは、家族や友人などへの感謝の意。また「将来に対する希望」や「向上心を持って職務にまい進したい」といったポジティブな声も多くありました。ともに任務を遂行していく仲間として、どれも頼もしく思えるような内容でした。

答辞が終わり、会食の時間になると、あの硬かった表情が徐々に和らぎ、笑顔が見られるようになりました。

口いっぱいにステーキを頬張り、楽しそうに会話する隊員が見られ、心が和む場となりました。

今後、徳操を養い、知識および技能の習得、経験の蓄積などにより、社会人および自衛官としての成長が期待されます。


笑顔で会食する隊員

高田（新潟県）
ラオス人民軍に対する能力構築支援 捜索・救助、衛生活動などに関する教育訓練

第2普通科連隊（連隊長・小段雄三1等陸佐）は令和5年12月17日から20日までの間、ラオス人民民主共和国ビエンチャンにおいて、ラオス人民軍に対する能力構築支援（派遣事業支援）のため、教官要員を派遣しました。

平成30年から実施しているラオス人民民主共和国に対する能力構築支援事業として、今回で4回目となります。この派遣は、災害発生時における捜索・救助、衛生活動などに関する教育訓練を行い、ラオス人民軍の災害対処能力を向上させることを目的とし、連隊からは8人の隊員が派遣され、現地で活動を行いました。

ラオス人民民主共和国ビエンチャンに到着後、4日間の日程でそれぞれの専門分野に分かれて機能別訓練を実施したのち、総合訓練を行い、所望の成果を得ました。

当初の任務を完遂し、両国の親交のさらなる深化に寄与し、無事帰国しました。

今回、派遣事業支援に参加した女性隊員の山下3等陸曹は帰国後「ラオス軍に対する能力構築支援に参加し、ラオス軍の練度向上、両国の友好な関係に貢献できたと感じました。また、ラオス派遣事業において女性隊員の派遣は初めてのことであり、両国の交流を通じ、女性の活躍する場を構築できたことを誇りに思う」と話しました。

教育実習風景

守山（愛知県）
岐阜県関ヶ原の大雪に伴う災害派遣 立ち往生の早期解消のため、除雪作業

第35普通科連隊（連隊長・松下竜朗1等陸佐）は1月24日と25日の両日、岐阜県関ヶ原IC付近で発生した大雪に伴う災害派遣に従事しました。

この冬一番の寒気がもたらした大雪により、岐阜県不破郡関ヶ原町の名神高速道路関ヶ原IC付近では、24日午前10時過ぎから車の流れが滞り始め、じ後、スタックした車両を先頭に立ち往生が発生。午後1時頃には車両のボンネットに約30cmの雪が積もり、午後2時頃には、車の立ち往生が上り線が約6km約500台、下り線が約5km約750台に及びました。

24日午後3時に岐阜県知事からの災害派遣要請を受け、第3普通科連隊は、関ヶ原ICに向け前進しました。派遣された隊員は、激しく雪の降る過酷な状況において、立ち往生の早期解消のため、スノーダンプ、角スコップを使って根気強く1台ずつ丁寧に除雪作業を行いました。

25日午前0時に上り線、午前4時頃下り線の立ち往生は解消し、25日未明、撤収要請を受け、任務を完了しました。

除雪作業を実施する隊員

帯広（北海道）
「おびひろ氷まつり」氷雪像制作に協力 大好評で、まつりの盛り上げに大きく貢献

第4普通科連隊（連隊長・南條衛1等陸佐）は、1月4日から28日までの間、帯広のまつり推進委員会が主催する「第61回おびひろ氷まつり」の氷雪像（すべり台・氷のレリーフ）制作に協力しました。

おびひろ氷まつりは帯広市の3大祭りのひとつであり、冬の風物詩として地域の人々から60年以上にわたり親しまれている行事です。

今回の制作隊は、第4普通科連隊が基幹部隊となり、帯広駐屯地に所在する10個部隊31人の隊員で編成され、部隊間の連携や隊員相互の意思の疎通を図り、厳冬季の中、一丸となって約1カ月に渡り、氷雪像制作の任務を遂行しました。

開催時間後に補修する隊員

今年は、例年に比して積雪量が少ないことから、すべり台の制作計画を一部変更して、土台部分をまつり会場の斜面を利用することにより、昨年と同じ約11㍍の長さのすべり台を制作しました。

あわせてアーチ状に形取った高さ約4・35㍍、横幅約7㍍の氷のレリーフを制作しました。

主として氷を使用しての制作作業のため、日々の気温や直接差し込む日差しを考慮し、創意工夫を凝らしながら、知識と経験を活かして制作にあたりました。

また、制作期間中には、数多くの協力団体などの皆さまから激励や慰問をいただき、このまつりに対する地域の方々の期待の大きさを感じました。

また、まつりのテーマである「北国の冬にぬくもりとよろこびを」を胸に隊員一人一人が、来場した地域の方々が喜び笑顔になることを想い浮かべ、期日までに氷雪像を無事完成させました。

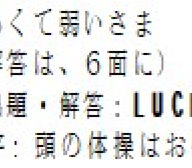
期間中の1月26日から28日の3日間は気温が高く、すべり台の滑走面の氷が溶けてしまいましたが、開催時間後に補修をするなど適切に対応し、すべり台利用者は約1万7500人（まつりの来場者数延べ約16万人）と大好評で、多くの子供たちの笑顔で溢れ、まつりの盛り上げに大きく貢献することができました。

漢字あそび 第18回

問題： 熟語知ってるかな？

初級
知らないとちょっと恥ずかしい
・残りかす
・貼り付けること

中級
意外とやっかい
・声を詰まらせるように咽び泣くこと
・騒ぎ乱れること、騒動、擾乱

上級
自慢できるかな
・もろくて弱いさま

（解答は、6面に）
（出題・解答：LUCKY）
※数字：頭の体操はお休みします。